

島の稲作文化を学ぶことから始まる

エコツーリズム

東まりこ

- 一 団体名 特定非営利活動法人西表島^{いりおもてしま}エコツーリズム協会（沖縄県竹富町）
- 一 事業名 西表島古来の稲作文化を活かした地域振興を目指す事業

世界自然遺産の島

西表島は沖縄本島から南西約四〇〇キロメートルに位置する、多くの人が「南の島」として思い浮かべ、透き通る青い海、カラフルなサンゴと熱帯魚、温暖でのんびりとした雰囲気のある島です。沖縄県の離島で最も面積が大きく（二八九・六平方キロメートル）、島の約九〇パーセントが亜熱帯性の森林のため、上空からは島のほとんどが濃い緑に覆われて見えます。島内には、浦内川を

はじめ多数の川が流れ、その河口には日本一の面積を誇るマングローブが広がっています。その豊かな自然が育んだ固有の生物多様性が評価され、二〇二二年七月「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」として世界自然遺産に登録されました。

島を一周する道路は無く、海岸沿いに県道が島を半周ほどしています。島内には一四の集落が点在しており、約二四〇〇人が暮らしています（令和四年末時点）。主な産業は、観光、畜産、農

業（米、サトウキビ、マンゴーほか）などで、特にパイナップルは絶品です。私が所属する西表島エコツーリズム協会（会員約八〇名）は、地域の方々と「人と自然が共生する島」を目指して活動しています。その内容は、西表島の山・川・海の動植物の生態など自然に関するあらゆること、先人たちの智慧や独自の文化などを学ぶ場づくり、記録や継承活動などです。「エコツーリズム」という名を冠していますが、協会として観光サービスを提供しているわ



けではなく、地域の観光関係者たちとともに西表島について学び、そこで学習した内容を観光客に伝えることで、ともに島の豊かな自然・文化を守っていきけるような観光の実現を目指しています。

稲作文化の継承による 持続可能な島づくり

あまり知られていませんが、西表島には、先人たちが自然と共生しながら育んできた稲作を中心とする文化が、五〇〇年以上続いています。今でも島で一番古い伝統的な地区である祖納^{そなひ}・干立^{ひした}集落では、一年を通じて節目ごとにさまざまな祭事を執り行なっており、なかでも旧暦の一〇月前後の「西表島の節祭^{シチ}」は、国の重要無形民俗文化財に指定されています。しかし、この祭事は、島で暮らしていても、その集落に住んでいなければ参加することはで

きません（一部見学は可能）。稲作文化を学ぶと、先人たちがいかに自然を畏れ、敬いながら暮らしてきたのがよくわかるのですが、そこに込められた意味などをじっくりと知る機会は、なかなかありません。

観光業に携わる人の多くは県外からの移住者で、西表島の文化をほとんど知らず、アクティビティを重視するツアーガイドも増えているのが現状です。近年は、オーバーツーリズムと呼ばれる観光客の増加による住民生活や環境へのさまざまな弊害も指摘されています。世界自然遺産登録により、さらなる観光客の増加が予想されるなか、持続可能な島づくりを進めていく上でも、観光に携わる人たちが稲作文化に対する理解を深めることの意義は大きいと考えています。

以上のような認識から、私たちは離島人材育成基金助成事業を活用して「稲作文化を学ぶ講座」を開き、祖納集

落で生まれ育ち、稲作を生業に自然に寄り添った暮らしをしている三人の講師から、稲作の歴史、昔ながらの手法、作業ごとに歌われる古謡、節目ごとの祭事、稲藁を利用した民具づくりなどについて学びました。

祭事は、コロナ禍で見学も制限されていたため、実際に目にすることはできませんでした。しかし、講師から、それぞれの祭のしきたりやそこに込めら



民具づくりの講師と参加者たち。

れた意味などについて詳しいお話を聞くことができました。年末に行なった民具づくりでは、お正月飾りをつくりました。作業に合わせて、生活のなかで使われてきたさまざまな民具や玩具を紹介していただき、講師の幼少時代の話も聞くことができました。なお、機械で収穫すると、藁は短くなってしまいますが、手刈りでは、民具づくりがしやすいように長く残して刈り取りません。藁の民具は今でも祭事にも欠かせないので、神司が座るための円座や、豊年祭では集落の住人総出で大綱をつくります。その大綱を使い集落の東と西に分かれて綱引きをしますが、東が勝てば子孫繁栄、西が勝てば豊年満作になるとされています。

日常生活にも活かせる

先人の教え

「稲作文化を学ぶ講座」と並行して「稲

作を学ぶ講座」を開き、稲作を実践しました。三〇〇平方メートルほどの小さい田んぼですが、種蒔きから収穫までの一連の作業を機械に頼らない昔ながらの方法で行なうことで、古謡や祭事に込められた意味などについて、理解がより深まりました。

育てているのは、台湾から伝わった「台光」という品種のお米です。天気によつて思う様に作業が進まなかったり、リュウキユウイノシシに収穫前の米を食べられるなど、自然に左右される体験も非常に勉強になります。「リュウキユウアカシヨウビンが鳴く前に田草取れ」「ツツジが咲く前に田植え」「イリオモテヤマネコの毛のように密生して苗が育ちますように」など、田んぼ作業の節目や目安の例えに、島の生きものがたくさん登場します。一連の作業を通し、先人たちと生きものとの距離感を体験することができました。知識に経験が加わることで、西表島の自



然・文化と暮らしの紹介に深みが増し、観光客に対してもより深い島の姿を知ってもらえることができると思います。講座の参加者は、稲作を通して、自

田植え作業の後、畔で古謡「田植びジラー」を歌う。

離島人材育成基金助成事業 事務局より

西表島エコツーリズム協会の活動は、本助成事業の「知的支援型」という類型に区分されます。知的支援型では島づくりに向けた実態調査やワークショップ、交流事業が助成対象となっています。同型の助成金額は本体型(100万円上限)と比較するとコンパクト(30万円)であるため、本体型を目指す前の準備として申請される団体も多いです。

観光事業者が稲作文化を学ぶことで西表島の自然や文化・歴史に対する認識が深まった当事業は、両者が連携する場づくりとして有効だったのではないのでしょうか。報告書には「講座の内容や実践的な稲作体験により参加者の興味関心を深め、コアメンバーを集めることができた」とあります。稲作文化の継承者不足に危機感を抱かれている西表島エコツーリズム協会やそのコアメンバーが、事業を通じて得た経験や交流をどのように地域振興に活かしていくのか、今後が楽しみです。

東 まりこ (ひがし まりこ)

1994年生まれ、東京都出身。西表島に移り住み6年目。西表島で2シーズン、カヤックとシュノーケルのガイドを経験した後、西表島エコツーリズム協会事務局員。

分自身の生活や環境保全の取り組み方についても見直すきっかけにもなったようです。先人からの学びは、観光面だけでなく日々の生活の上でも重要です。

今回の講座をきっかけとした観光事業者と稲作従事者のつながりを活かし、観光に農業体験を取り入れたり、島のお米を観光客へ提供する仕組みづくりなど、お互いの理解を深めながら、西表島の振興に結びつけていけるよう、定期的な意見交換などを継続していきたい

たいと考えています。

講座の講師はいずれも七十代で、その貴重な経験と知識をいかに継承していくかが大きな課題となっています。

言わば、その人こそが西表島の文化であり、いなくなることで文化も喪失してしまうのではないかと、という危機感を持っていきます。そこで、今回の講座の模様は、写真や動画、音声などできる限り記録しました。この記録を活用して、稲作文化をわかりやすくまとめた資料や普及啓発のツールづくりに取

り組みたいと考えています。

今回の事業を通して多くの学びを得るとともに、じつは私たち自身が田んぼ作業を楽しむようになってしまいました。泥にまみれて体を動かし、仲間たちとつくった米を食べることは、より西表島の自然・文化に根づいた生活だと感じます。いまは白米のみの生産ですが、収量アップを目指したり、黒紫米、もち米、五穀、田芋など品種を増やしたりと、メンバーたちの夢は広がっています。